

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1990年

5月号
(通巻98号)
400円

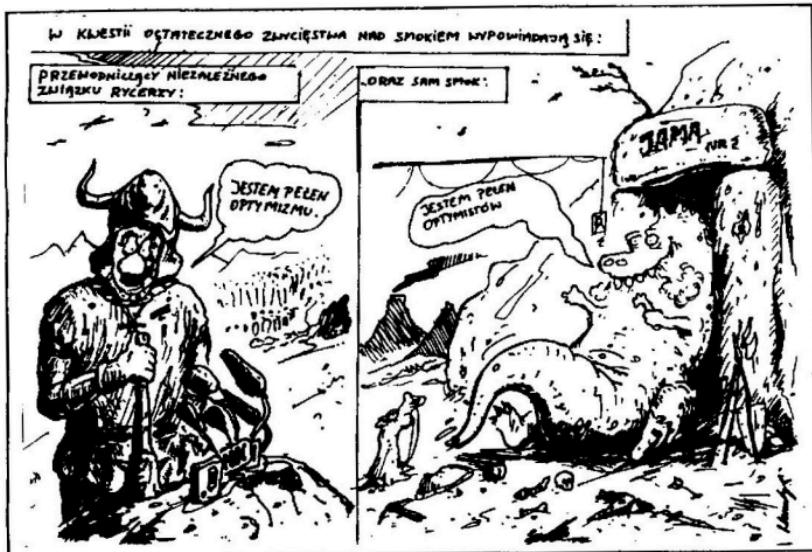
ポーランド月報

円卓会議後のポーランド情勢

コンスタンティ・ゲーベルト

新しい体制と「連帯」の任務

ヴワディスワフ・フラシニュク

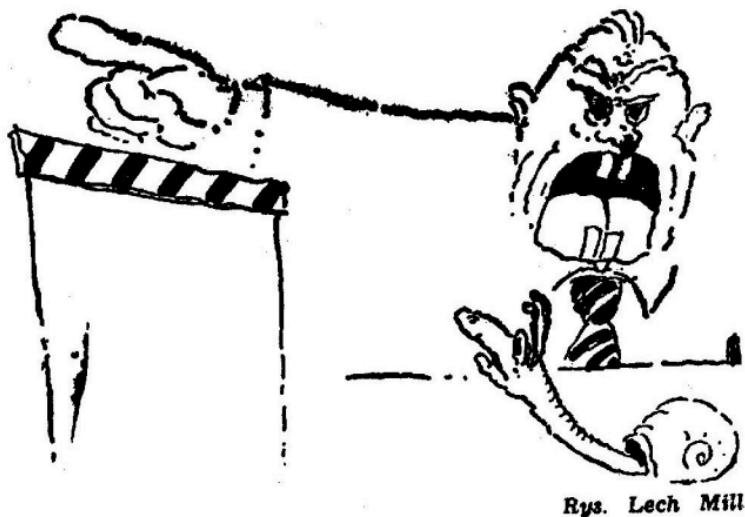


竜との戦いの最終的勝者は誰か

独立騎士組合議長：私の胸中は楽観主義で一杯です

竜：俺の腹の中は楽観主義者で一杯さ

円卓会議後のポーランド情勢.....	3
報告：コンスタンティ・ゲーベルト	
戒厳令体制を超えて.....	10
コンスタンティ・ゲーベルト氏と語る——工藤幸雄	
新しい体制と「連帯」の任務.....	14
インタビュー：ヴワディスワフ・フラシニュク	
リトニアの自由はロシアの自由.....	17
アダム・ミフニク	
ポーランド日誌 1990年2月22日～3月14日.....	18



円卓会議後のポーランド情勢

報告：コンスタンティ・ゲーベルト

The Situation in Poland after the Round Table
Report by Konstanty Gebert

【編集部注】 ポーランド「連帯」のジャーナリスト、コンスタンティ・ゲーベルト氏を囲んで、さる3月23日、東京で開催された研究集会での氏の報告とその後の討論の要旨を紹介する。ゲーベルト氏は1953年生れの心理学者で、1981年12月の戒厳令布告後、主として地下紙『KOS』に提りながら、ダヴィド・ワルシャフスキの筆名で軍政批判の鋭い論陣を張った。その所論は本誌でも何度か紹介した（83年5月、84年6月、85年3月、85年7月、87年4月の各号）。研究集会の開催にあたっては、ゲーベルト氏を日本に招待した国際会議「地球民主主義の条件」の坂本義和氏のお世話になった。文責は編集部。

初めにお断りしておきたいが、私は「連帯」の指導者ではなく、一介のジャーナリストである。私は「連帯」について、あるいはポーランドについて語ることはできるが、「連帯」の名において、あるいはポーランドの名において語ることはできない点はご承知おき願いたい。

今日はポーランドの現在について述べようと思うが、まず、現状に至る過程をかいづまんで説明したい。

円卓会議

昨年6月の上下両院選挙で、歴史的展開が生じた。国民は50年ぶりに、部分的に自由な選挙で将来を論じることができた。部分的に自由というのは、下院の議席配分があらかじめ決まっていたことによる。このような選挙の形は、円卓会議で定められた。私も参加者の1人であった円卓会議は、平和的な手段によって、ポーランドをより自由で民主的な方向へ発展させることを目的としていた。しかし当時は、政府も反対派側も、こんなに早く現在のような民主主義的状況が到来するとは予想だにしていなかった。円卓会議が何よりも意識していたのは、反共流血蜂起をくいとめねばならないという点だった。統一労働者党側は、蜂起となればソ連軍の導入なしで乗り切れない、しか

しソ連軍は今度はやってこない、ということを認識していた。「連帯」=反対派側はより複雑な立場だった。蜂起が生じて共産政権が倒れるまで待つ方が良いと考える人も多くいた。しかし、ワレサや市民委員会など「連帯」指導層の大部分は、そういう爆発を待っている余裕はポーランドはないと考えた。カトリック教会も同じ考えだった。それゆえ、「連帯」は会議のテーブルについたのだ。

当初「連帯」は円卓会議でまず再合法化を目標とし、あとは表面的な政治状況の変化しか実現されないと考えていた。しかしフタをあけてみると、政府の方は、国民にもっと信頼される政府になるために大胆な政治・経済改革を考えており、その面で「連帯」の協力を求めていることが明らかになった。再合法化は比較的すんなりと決まり、会議の焦点は政治・経済改革の分野に移った。

政府は「連帯」に、共同の候補者リストで選挙に立ってくれるよう望んだ。これはむろん受け入れられない。われわれの側は完全に自由で民主主義的な選挙を要求し、政府はこれを受け入れることはできなかった。妥協として、議席を予め配分する形が生まれた。しかし党は自己の優位を確実にするため、ヤルゼルスキの大統領就任を想定した大統領制を提案した。われわれ難色を示したが、

党はあくまで引かなかったので、妥協策として完全自由選挙の上院が新設されることになった。

最も困難だったのは経済改革の問題だ。ここでは対立の構図は党対「連帯」ではなく、自由資本主義対社会民主主義だった。党内にも「連帯」内にも、自由資本主義者と社会民主主義者の両方がおり、このため双方とも統一性のある案を出すのが困難で、結果的に、内部矛盾をかかえた、ポーランドの将来にあまり益するところのない結論が出されることになった。

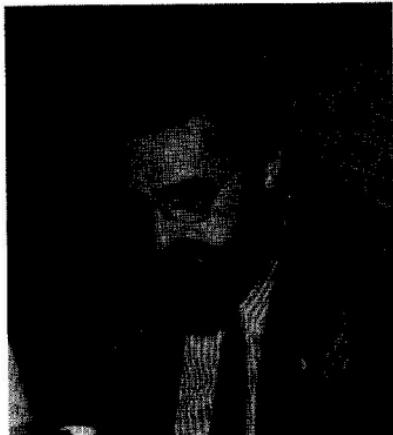
選挙での「連帯」圧勝

円卓会議で作られたトランプの城のような計画は、6月4日の選挙でもろくも崩れ去った。予想外の事態がいくつか生じた。まず、非常に高くなると予想されていた投票率が、67%にしかならなかったこと。第2に「連帯」が圧勝したこと。第3に、党連合側に配分された65%の議席のほとんどが第1回投票では決まらなかったこと。第4に、上院100議席中「連帯」が99議席を取ったこと。

この新しい勢力地図下での最初の危機は、大統領選出劇だった。大統領は上下両院全体の投票で決まり、ヤルゼルスキを唯一の候補とする、ということになっていた。しかし党連合側から反ヤルゼルスキの動きが出てきた。「連帯」はジレンマに悩んだ。「ヤルゼルスキを大統領に」という円卓会議での合意は、文書化されない口頭約束だったので、それをあくまで守るのか、それとも自前の候補を立てるのか。しかし結局、政府は自由選挙の約束を守ったのだからわれわれも約束を守らねばならないということで、ヤルゼルスキを当選させた。彼は過半数プラス1票というギリギリの得票で当選した。

マゾヴィエツキ政権

次に、党に組織能力がないことが明らかになつた。これまで統一労働者党と手を組んでいた統一農民党が離反はじめたのだ。そして長い交渉の末、マゾヴィエツキ政権が誕生した。統一労働者党は少数派になった。



コンスタンティ・ゲーベルト氏

国の政治状況はあっという間に変化し、われわれは予想もしなかった勝利につぐ勝利を収めた。しかし経済は悪化の一途をたどった。ラコフスキ前政権は、農産物価格自由化によるインフレという置き土産を残していった。年末の時点でインフレは年率にして1000%となり、国庫はからっぽ、9月には追加予算を組まねばならず、それがさらにインフレを助長した。経済問題はマゾヴィエツキ政権の最大の課題となり、相当にドラスティックな経済改革がバルツェロヴィチ蔵相を中心に立案され、施行された。

この改革の主要な点は4つある。第1に、ズウォティの国内交換性の回復。1月1日から、国立銀行だけでなく民間両替所でも外貨を自由に売買できるようになり、同時にズウォティの対ドル・レート切り下げ（1ドル=9500ズウォティ）が行われた。IMFからの通貨安定化基金のおかげでこのレートは維持することができ、今では公定レートと民間レートは同じになっている。これは大成功といえる。

第2は、商品に対する政府補助金の廃止。この結果、1月のインフレ率は前月比78%にもなったが、2月には20%、3月には6%となり、インフレ抑止の目的は達成できたといえよう。

第3に、企業への補助金をなくし、赤字企業は倒産することになった。これにより、従来は存在しないことになっていた失業者が1.5万人（労働総

人口は1700万人) 出てきた。失業者はその後も増え続け、今年末には政府予想で40万人、世銀の予想では100万人にのぼると見られている。しかもこの数字はどちらも農村での失業を含めていない。われわれの予想では、年内に個人農の4分の1は破産すると考えられている。新たに失業手当制度が設けられ、9カ月間手当が支給されることになっているが、この制度は失業者数を40万人と想定して作られたため、もし失業者数がそれを超えれば、当然手当は少なくなる。

第4の、最も長期的影響を持つ要素は、大量の企業民営化だ。企業全体、あるいは破産企業の資産の一部を売却する形が想定されている。企業ひとつをまるごと売る場合、その株の20%は有利な条件で従業員に売ることになっている。しかし、大部分の企業の場合、国が総株数の半分以上またはその企業を支配できだけ十分な株を持つ、という形になっていない。この民営化は、ポーランドを外国資本にとって魅力的な投資先にする 것을 목표로 하고 있다. 그리고 그 외에도 국내에는 자본이 있는 기업은 많지 않다. 그래서 정부는 그 기업을 지원하거나 일부를 사들이거나 하는 방안을 모색하고 있다. 특히 외국인 투자를 유치하는 데에 초점을 맞추고 있다. 그러나 경제 구조 개혁과 함께 외국인 투자를 유치하는 것은 쉽지 않은 현실이다.



Price Market Population

種の戦時経済として受け止めている。世論調査でのマゾヴィエツキ首相の支持率は70%以上であり、経済改革の主な立案者バルツェロヴィチ議相も同様に高い支持を得ている。しかし私は不安を覚えている。80%という支持率は、政策判断に基づくものというより、一種の信仰に基づく行為だ。政府はみんなのためになることをしているという信仰。だが経済改革の結果がすべての国民にとって良いものとは限らない。実際、マイナスの影響をこうむる人もいる。例えば、円卓会議では賃金物価スライド制のスライド率は80%と決められていたが、今では30%にまで落ちている。社会と指導者のハネムーンはいつまでも続かない。もし経済改革が今年の夏までにインフレ率と同率の収入増をもたらさなければ、政府の支持率は大幅に下がるだろう。

そうなると、労組としての「連帯」の立場は極めて複雑になる。「連帯」は政府が頼みとする唯一の勢力である。「連帯」がマゾヴィエツキ政権の経済改革への支持をやめることになれば、それは単に経済改革批判にとどまつてはいられず、政府そのものの不支持となる。ところが他の政府を作る力を持っている勢力はない。マゾヴィエツキ政権が倒れることになれば、新たに選挙を行わねばならないだろう。

「連帯」は4月に第2回大会を予定している。この大会では「連帯」は政府の経済計画に対して

経済改革の成否がカギ

では、マゾヴィエツキ政権のかかえているいくつかの問題について述べよう。

社会は上述の大規模な経済的変化に対して、抑制的な反応を示した。人々はこれを、可能ないいくつかの経済政策のうちのひとつとしてではなく、ある

距離を置くことになろう。というのは、「連帯」には旧官製労組O P Z Zという強力なライバルがいるからだ。O P Z Zは現在かなりの勢力を持っている。「連帯」の組合員200万人余(1981年の4分の1)に対し、O P Z Zは450万人を擁している。O P Z Zの支持率も、去年の9月に8%だったのが12月に37%、1月に40%、2月に42%と伸びている。この人気の理由はO P Z Zが政府の経済政策に批判的な立場をとっていることだ。国民は「連帯」を政治勢力として支持し、政府を信頼しているが、こと自分や家族の将来となると不安を持っている。現在のところはO P Z Zの人気は政治資本にはならないが、政府の経済政策が失敗すればO P Z Zは政治勢力となりうるだろう。

ポーランド＝ドイツ国境問題

政府の直面している次の課題は対独関係だ。ポーランドは第2次大戦後、東の領土を失ったかわりに西の領土、つまり旧ドイツ領を得た。この西側国境であるオーデル＝ナイセ線を西ドイツ政府が認めたのは1970年になってからだ。しかもこれは西ドイツの名において認めたもので、将来の統一ドイツの名においてのものではない。西ドイツ政府は今もこの立場を変えていない。ところが統一ドイツの方は現実の問題になりつつある。統一問題は国際会議(2+4方式—東西ドイツ+米英仏ソ)で話し合わされることになっているが、この会議でポーランドに関する事項を論じる時にはポーランド代表も参加させるようにとポーランド政府は要求している。これに対し西独、米、ソは拒否、英仏は支持を表明している。全く新しい国際勢力配置が生じつつある。アメリカは大国ドイツとの関係を悪化させたくない。それに比べれば対ポーランド関係など大して重要ではない。驚いたのはモスクワも同じ考えだったことだ。上述の西独政府の立場が確定化したのは、コール首相のモスクワ訪問後だ。ソ連からの帰国後、コール首相は、統一ドイツはもちろんポーランド国境を認めることができる、ただしポーランド側もそのためにはいくつかの条件を満たさねばならない、と発言したのだ。その条件自体は受け入れられな

いものではなかったが、問題はポーランド西部国境がそういう話の対象、取り引き条件になるということの方で、それは容認しがたかった。もしポーランドがドイツ側の出した条件を満たさなければ、ドイツも国境を認めなくてよいことになるからだ。コール首相は5日後にこの見解を撤回したが、それは他の西欧諸国から圧力を受けたからで、モスクワは終始沈黙していた。見たところ、ソ連もポーランド同様に西ドイツからの資本導入による経済再建を期待しているようだ。西独資本が入ってくれるなら、そのために〔ポーランドといふ〕政治的代価を支払うこともいとわないよう見える。ポーランドにしてみれば、これは非常に不快な連想—1939年のリッペントロップ＝モロトフ協定、1922年のラバロ条約—を思い起こさせる。

こうした状況は、国際的にだけでなく、内政面にもさまざまな影響を生んでいる。歴史的に、戦前のポーランドで最も強かった政党は、社会党と国民党だった。この2つの党は反共という点では一致していたが、政治綱領の面ではかなり違っていた。社会党は国際主義的で西欧への開放政策を取り、内政面では議会制民主主義の福祉国家を目指していた。国民党は逆に、ロシアとドイツの両大国にはさまれているポーランドはどうらかと結んで他方と対抗しなければならないとして、汎スラブ主義の立場からロシアを選ぶべきだと考えていた。内政面では権威主義的政府と非人間的な法人型国家を目指していた。この戦前の国民党は極右だったが、意外にもこの党の考え方方がまさに戦後の共産主義ポーランドで実現されることになる。

国民党的な考え方方はポーランドに今も存在し、支持者を増やしつつある。そして今日の西ドイツの政策は、戦前の国民党の描いた世界観にかなり一致している。このように、国際政治における国民党主義者の姿勢が今や現実のものとなりつつあるので、内政面での彼らの政策の人気も上がってきている。これはコール首相の政策の直接的影響である。むろん今のポーランドでは国民党主義者はごく少数だ。しかしそれでも脅威になりうる。

ふたつの展望——楽観的と悲観的

おわりに、今後ポーランドの進んでゆく道すじとして、2つの可能性を提示したい。2つのビジョンはその通りの形で実現されることはありえないが、この2つの間のどこかにポーランドの将来があると思う。

まず樂観的な展望から。これは2つの前提に基づく。第1に、バルツェロヴィチの経済改革が成功する。西側資本が流入し国内経済が活性化される。第2に、欧州の政治統一メカニズムにより、コール首相の思惑をストップさせることができる。それとともに同じ欧州の政治統一メカニズムによって、中欧の民族対立(例えばトランシルヴァニアのハンガリー人とルーマニア人の対立)をうまくおさめることができる。こういった民族対立の激化はポーランド国内の安定もおびやかすからだ。

この2つの前提が実現されれば、ポーランド国内の経済は安定化に向かうだろう。政治面では、政界は4つの大きな党を中心に編成される。右に国民民主党、中道に強力なキリスト教民主主義政党(議会制民主主義、自由市場経済、国の強力な保護者機能、反民族主義)、そして左に向かって農民党、社会党の4つだ。このうち、キリスト教民主主義党と農民党が将来は手を結び、選挙に勝って安定した政府を作ることになる。

次に悲観的な展望の方。第1に経済改革が失敗し、外国資本は入って来ない。40年間共産主義支配下にあったポーランドには、西側タイプの自由市場がたやすく導入され定着するというふうにはゆかない。そのひとつの中証明が極端な国内資本の不足だ。第2に、ヨーロッパの民族対立が深まる。ポーランドとドイツの対立だけでなく、なによりもソ連国内の民族対立が問題化する。これは民主主義の発展にとって好ましくない。この状況下ではポーランドの民族主義運動も高まることは容易に想像できる。生活条件悪化に不満をつのらせる戦闘的な労働者とこの民族主義者が手を結び、左右のデマゴギーが一緒になってポーランドの民主化に敵対する……。

希望と信念があれば道はひらける

私は、悲観的シナリオの方が可能性が高いとは思わない。ポーランド人は非常に長い間民主主義のために闘ってきた。そう簡単に民主主義を捨てることはなかろう。人々は多くの犠牲が必要なことを認識しており、よほど明白な何かがない限り反乱は起こさないと思う。それに、これまで民族主義によって幾多の苦い経験を味わっているので、民族主義の誘惑にたやすく落ちることもないだろう。

ポーランドには、他の東欧諸国にはない重要な決め手がある。それは、経験ある政治的活動家の



肉食質に行列する人々

グループの存在だ。われわれはこの10年間を無駄に過ごしはしなかった。地下運動の最盛期には、約10万人が活動していた。彼らは大きな政治的経験を積んでおり、政治問題が簡単に解決されるものではないことを知っている。紙の上に描かれたイデオロギーは美しくても、実際の政治場面では具体的な細部の問題が決定的な意味を持つということを、彼らは認識している。そして過大な期待を抱いていない。ベルリンの壁崩壊やハヴェルの大統領就任を、ポーランドはうらやましく見ていた——ポーランドには今回そういう民主主義の祝祭はなかった。われわれは10年前に祝祭をすませたのだ。そしてそれ以来、そのときの希望を一部でも実現するために努力してきた。われわれは奇跡のないことをよく知っている。しかしながら、断固として希望を持っている国民なら、最もユートピア的な希望をも実現することができる事を知っている。われわれの頼みとするのはそのところだ。

討論

——「連帯」の本来の理念の1つは政治的複数主義だが、現在、「連帯」があまりに強すぎて他の政治潮流が育たないという状況が生まれているのではないか。「連帯」は全体的な政治的地図の中でどのあたりに位置するのか。

たしかに現在、「連帯」勢力が政治情勢を独占している。しかし「連帯」内部には実にさまざまな政治的傾向が存在し、10年前の統一労働者党による政治権力の独占とは意味が違う。今後の可能性として3つの可能性が考えられる。第1は「連帯」が政治的独占者となること。こうなれば「連帯」は労働組合ではなくなるから、この方向の支持者は少ない。第2は政治組織を別に形成して自らは純粋な労働組合にとどまる事。望ましい方向だが、歴史的に先例がなく、実現は難しいだろう。第3は政治舞台で主役を演じながら、自らの周囲に特殊な政治文化を形成すること。これは政治的対抗文化としての役割を担っているイタリア共産党的やり方に共通する。ポーランドでも実現可能であり、このために「連帯」は選挙に独自候

補を立てることはせず、政治的なフォーラムかつ民主主義の保証人として機能したいと考えている。この考えをワレサ委員長も支持している。

——「連帯」と議会市民クラブ（OKP）の関係は？ OKPが複数の政党に分岐する可能性は？

OKPは「連帯」から独立した組織であり、そのようなものとして現在、地方選挙の準備にとり組んでいる。この中でさまざまな政治的傾向の競合状態が生まれようが、そうなれば政治的複数主義の観点からすれば成功だ。しかしきつつかの政党への分裂といった事態は当面はない。地方ではまだ共産党支配体制が残っており、その解体のためには統一した行動が必要だからだ。

——ポーランドを訪問した海部首相に対し日本企業による協力要請が出されたが、その中に食品産業は含まれていなかつた。

経済再建の出発点として緊急に必要とされている協力要請がなされた。農業・食品工業の現状はそれほど悪くない。しかしテクノロジーの近代化が必要で、そのためには外国からの投資が望まれる。そうなればソ連市場への進出が可能になる。

——グダンスク造船所への外国資本の導入交渉が行き詰っているようだが、西側資本の導入の可能性は労働組合が強すぎるために阻害されているのではないか。

外国資本の導入はポーランドが抱える諸問題の解決にはならず、その可能性を与えるだけだ。グダンスク造船所への米系資本導入交渉が決裂したのは、米国側が基本的に既存の技術水準で低賃金を利用して利益をあげようとしたからだ。「連帯」側は適切な投資をすれば競争力はあると考えている。それに従業員の利益だけでなく、国民经济全体の利益を考えるべきだと判断した。

——共産主義的組合〔OPZZ—旧官製労組〕の支持基盤はどこにあるのか。

破産に直面している企業の労働者や中小企業労働者で、個人的利益の防衛が中心だ。ここは「連帯」組織が最も弱いところで、今度の地方選挙を

通じて組織の強化をはかりたいと思っている。O P Z Zが労働条件の改善や作業安全を要求するなど、積極的役割を果しているところもある。

——かつてシェチという組織があって、工場レベルの自主管理運動に取り組んでいたが。

現在は一般に自主管理のプログラムは存在しない。労働者の支持がないからだ。政治権力と経済権力が同一の手に握られることへの抵抗もある。

——「連帯」内の社会民主主義的傾向はどのような経済政策を主張しているのか。自由主義的資本主義の主張との違いはどこにあるのか。

全体として自由主義的資本主義派が優勢だ。クーロン自身が大臣になってから、極端な自由化政策を支持するようになっている。彼のかつての協力者であるカロル・モゼレフスキはこの傾向に反対で、「労働者の利益擁護運動」という議会内組織を作っていて、ここに社会民主主義的傾向の議員が集まっている。社会民主主義的傾向は、市場経済と民営化の可能性を作りだすには賛成だが、これによってはポーランド経済が抱える問題は解決されないと考えている。社会の利益、労働者の利益を守る大きな仕組みが必要だ。しかし現政府の改革政策が失敗すれば民主主義陣営の全体が倒れるから、今の改革を支持しなければならない。現在のポーランドには資本主義システム以外のオルタナティブは存在しない。資本主義モデルといつてもスウェーデン型、チリ型といろいろあるが。

——中欧・北欧諸民族の自決権の問題をどう考えているか。バルトやウクライナの諸民族との新しい連邦構造をめざしているのか。

民族自決の問題は「連帯」にとっても重要だ。たとえば、統一ドイツ実現はポーランドに脅威だが、反対の声はない。しかし現実には、リトアニアやウクライナでポーランド人差別などの問題が出てきており、連邦制は望ましいと思うが、その実現は遠いという感じを持っている。この間民主化された東欧諸国の中では、西側からの援助をめぐってすでに対立関係が現われてもいる。ポーランドとチェコスロバキアほどお互いの反対派同



士が親密だったところはないが、今はこの関係もくずれている。

——バルツェロヴィチ（農相）の改革案に関連して聞きたい。第1に、企業を国家的管理から解放して自立させることが基本だが、このためには必ずしも企業の個人所有化は必要ではなく、たとえば企業相互間の株式の持合い制でよいはずだ。こうすれば、国内資本を民営化のために使う必要はなく、むしろ中小の資本主義的企業の発展に使って、より効果的だと思う。第2に、インフレ抑制策が個人企業や中小企業を破滅させて、その後の経済発展の主体が残らないといった事態にならないか。第3に、西側の農業援助は国内農業の破壊につながるのではないか。

経済改革の目的は、民営化そのものよりも新しい資本を見出すことだ。そのために株式の持合いも進んでいる。ただし、競争を通じて再編成が進むと、結果的に持合い制が発展するが、多くの株式が外国の支配下に置かれるといった事態も予想される。インフレ対策で中小企業が倒れているのは事実だが、彼らがG N Pに占める比率は小さく、経済改革がもたらす全体的な経済の活性化効果の方が大きい。ただし一定の保護構造は必要だ。食糧援助はインフレショックの緩和のために必要だが、農業に打撃になるという指摘はそのとおりだ。

〔反訳：高橋 初子／水谷 翼〕

戒厳令体制を超えて

コンスタンティ・ゲーベルト氏と語る——工藤 幸雄

Rozmowa z Konstantym Gebertem, Yukio Kudo

わが家にゲーベルト氏を迎えたのは、3月31日の3時間たらずである。新宿でファックスが買いたいという氏を案内してから別れたあとに、爽快な彼の印象が今も鮮明だ。「さくらもきょうあたりが最後ですよ」、「ああ、ぼくが日本に着いたころから咲きだした。ことしは花が早かったそうですね」。小田急の駅に向かうタクシーのなかで、そんな会話をした。雨が降っていた。

戒厳令下で

またの名はダヴィド・ワルシャフスキ、戒厳令後はその筆名でKOS（社会抵抗委員会の略）などの地下紙に論陣を張り、情勢判断、分析力の確かさでわれわれの目を惹いた。しかも国際問題にも目くばりが届いている。てっきり数人の優秀な書き手がひとつの匿名を共用しているのかと思ったほどだ。そう話すと彼は笑った。

「収容所に抑留された仲間にKOSをこっそりいつも差し入れたら、こいつはゲーベルトにちがいないと見抜いた友人がひとりだけいたよ。今は少数民族を担当する次官になったが。文体から分かったそうだ。あの当時は、ふたつの名どころか、父親の出身地の名とかを借りてまだまだ別の名もつかったよ」。

「匿名を使う例では、こんな話もある。ある都会（ウッチ市と言ったか）で抵抗組織をふたつ動かしていた男が、ふたつの名前を使い分けている。そのうちに、この男、とうとうその別々の組織の責任者、つまり自分が自分と会わなければならぬ羽目に陥った。匿名同士、本人と本人との会見というわけさ。はっはっは」。

「戒厳令時代を描く映画がいくつかできたが、どれも『連帶』の闘士と警察の悪者というお決ま

りのストーリーばかりで面白くない。むしろ、こういう滑稽な面をユーモラスに追ったほうがいいんじゃないかな」。

「お宅にも猫がいますね。うちにもいるんだ。名前はオフセット。人からもらったとき、ちょうど地下出版用にオフセット印刷機がほしかった。それで猫の名がオフセットとついた。ところが、上の息子が5つ、下の子が3つのころだったか、ワジエンキ公園にうちじゅうで散歩に出たら、走りまわっていた上の子が駆け戻ってきて『茂みのなかにオフセットがあるよ、ひとつが大きくて、あのちいさいのが3つ』と大声で言った。オフセットなんて、禁句の戒厳令下でしょ。青くなつた。つまり、うちのオフセットによく似た子猫たちの親猫をつけたという報告なんだが、他人が聞けば重大事、周りを見回したよ（日本語とちがって、ボーランド語には「いる」と「ある」の区別をしない。子どもの発言をここではわざと誤訳した）。それからなんにちかして警察に踏みこまれたが、そこらじゅう紙をちからかしてあったから大慌てだった」。

——学校で教えた経験はおありますか。

「ああ、ある。そのうちに大学に戻りたいと思う。あれは楽しい仕事だから」。

——映画のワイダさんが、そろそろ上院議員として政治のほうに専念したいと日本のテレビ・インタビューで答えていますが……

「それはよしたほうがいい。政治家向きじゃないもの。来年の総選挙で落選すると助かる。こんどは有名人というだけで票の集まることはないはずだから。政治家には特別な何かが必要なんだ。ミフニクも政治には向かない。彼の新聞『ガゼータ・ヴィポルチャ』にしても、OKP（議会市民クラブ）の機関紙のようになってしまった。独立

不偏のはずが、OKP一辺倒じやこまる。新聞に書くものも、時間に追われての仕事だから、荒れてきて惜しいと思う。彼は著作に戻るのが向いている。ぼくにも評論欄の担当をしてくれと話がきたが、お断りした」。

新しい体制

——ラジオ・テレビ委員会の議長になったドライチさんの評判が芳しくないようですが……。

「報復しない——というマゾヴィエツキ首相の方針に忠実すぎるんだ。首切りをまるでしない。だから、戒厳令で首になった人たちが職場復帰もできない。憎まれっ子のキャスターの首さえ遠慮している。つい1、2年まで『連帯』のことを口ぎたなく罵っていたのが、口をぬぐってマゾヴィエツキの政策に讃辞を奉ってだれが信用できますか？」

「ちかごろの人気番組に“Otwarthe studio”（開かれたスタジオ）がある。討論形式なのだが、呼ばれたゲストのほかにだれがきても参加できる。議論が白熱すると明け方までもつづく。このあいだは若い男がどこそこの秘密警察の高い地位にいると自己紹介して、秘密警察からのゲストに確認を迫ったりしていたよ」。

「ドライチは温厚でいい人柄だが、議長にはがむしゃらな人物にきてはしかった。そこへいくと、ゲレメク（OKP議長）は政治家として打ってつけだ。ぼくは円卓会議にオブザーバーとして出でていたが、交渉でかちとるものを残らずかちとれたのは彼の政治力だ。面白いのは、交渉相手（ここに名が入ったが失念）は彼と幼友だちで、公式の席では呼び名でやっていた。この人は心理学者で、ぼくの大学時代の教授でもある。政府側のもうひとりを加えた昼食のテーブルには、ぼくのほかに同じ心理学専攻の弟子もいた。教授が、これがぼくの弟子とその代表に紹介したら、もっとしっかりした弟子を育ててはしかったなどとからかわれていたな。そんな円卓会議のこぼれ話をびっしりと書きこんだぼくの本が近くロンドンの『アネックス』社から出る。著書と言えば、この秋からワシントンで数ヵ月暮らしながら、もう



ゲーベルト氏が中心となって復刊した週刊紙『ボ・プロストゥ』

1冊の本も書く。奨学金が出てね。こんどのは『地下運動のすべて』といったものになる」。

——OKPには、さまざまな勢力があって寄り合いの所帯というか、1本じゃないようですね。

「そう。左から右までいろいろだ。早晚、旗幟鮮明にしてばらばらになるでしょう。そのほうがいい。大統領選挙ではワレサの当確は確実だ」。

17日に横浜に会いに行ったとき、ヤルゼルスキの辞意は固いと話し、ワレサのほかにはブジェンスキ（ブレジンスキ）担ぎ出しの動きもあると打ち明けていた。

「マゾフシェ地区の『連帯』議長から退いたブヤクは、ワルシャワの市長選挙に立候補する。これも当確だろう。地方選挙は5月になる」。

ノメンクラトウラの息子

わが家の書斎に顔を見せたとたんに、わたしは棚に置いてあったユダヤ教信者のかぶるお椀帽子に気づいて、それを頭に載せた。和服のままである。この帽子はI・B・シンガーのわたしの訳書の助手を務めた女性がロンドン土産に買ってき

ものだ。それを見ると、ゲーベルトは「そうだ、ほくもかぶろう。きょうは土曜日、安恵日だものね」と玄関に引き返し、荷物をこそそそやっていったが、やがて戻った。変化は何もない。くるりと後ろを見せたら、ほんのちいさな布切れほどの浅いお椀帽がヘヤピンで留めてあった。ふざけているのか、大真面目なのか。後のはうらしい。

「父親はボーランド人、母がユダヤ人です。ノメンクラトゥラで大使だった父について任地のトルコに何年か住んだ。そのころはトルコ語が話せたし、読み書きもできた。忘れてしまったのが惜しい。帰国してから高校生のときが、ちょうど68年の『3月事件』で仲間とデモに出て、警官の警棒でこっぴどく殴られた。よかったよ。ノメンクラトゥラの息子もあれで目が覚めた。覚めていなければ、いまごろはせいぜいが、良心派の党员といったところかもしれない」。

——2年後の92年は、ブルーノ・シュルツの生誕100年に当たるので、それまでには、書簡も含めて3巻の選集をまとめたいと思って……〔ゲーベルトは、これをブルーノ・ヤシェンスキ（ヤセンスキイ）と早合点した。最初に会った日、わたしから、昔に訳したヤシェンスキの長編『無関心な人々の共謀』がボーランドとの出会いの始まりと話したせいだ。そのときは「うちの母がヤシェンスキの大ファンでね」と反応した〕。

「シンガーソング・ライターのカチマレクの歌がある。ぼくには歌えないが、歌詞は覚えている」。そう言って、彼はその文句（聞くだけではよく意味が聞きとれないほどむずかしい）を暗唱はじめた。実に長々とした歌詞なのだが、いかに韻文とはいえ、よどみなくつづける彼の記憶力の良さに「あたまのいいひとねえ」と室内ともども舌を巻いた。

ブルーノはなかなか登場しない。あのほうにきて、コリィマーの地名が聞こえ、悲惨な死を暗示する言葉もあった。共産党の党员作家だったブルーノは、根拠のないスパイ容疑でコリィマー収容所へ護送の途中にウラジウォストーク郊外で病死した。終わってゲーベルトが言う。「テープが手に入ったら送りますよ。なかなかいい歌なんだ」。これを歌うカチマレクは、確か西ドイツに



住んでいる。彼には人々の前に立ちはだかる「壁」という「連帯」時代の名曲がある。

役に立たない秘密警察出身者

——ちかごろ、警察の改組をどうするのかの論議がさかんですね。これまでのいわゆる「民警」の名をやめて、「警察」とすべきだとか。秘密警察をどうするとか。

「そう。警察の労働組合の連中と会ったことがあるが、これがいい人たちでね。われわれなどよりよほどラディカルなにおどろいた。秘密警察は6万人いるが、ふつうの警察の人たちは、秘密警察が解散されて自分らのところにくるのをからってお断りだと言っている。S BとかUBと呼ばれる組織の関係者は“密告屋”なども入れて、それだけの員数になるわけだが、彼らには特技とするものが無いのが欠点で、やめさせても使いようがない。国家機密の保護とかの目的である程度の秘密機関は残されるだろう。ただし、逮捕権は持たせないなどの権限縮小はぜひとも必要だ」。

「警察関係の役職に戦後、ユダヤ人や白ロシア

人の多くが幅をきかせたことで世間の恨みを買ったが、少数民族に対する差別観の強いポーランド社会では、あの当時、あれしか生活の立ちようがなかったという事情も考慮すべきだろうね。今でも白ロシア人のあいだには『連帯』はポーランド人のものと見る不信感がつよい。最近、『白ロシア民族同盟』という組織が生まれたのもその結果だ。

——2月に復刊された週刊紙『ポプロストウ』Po Prostu(ザブリ)について……。1957年にゴムウカ政権が廢刊を命じたときのトゥルスキさんが編集長に返り咲きですね。

「ほくも大いに協力します。ゲーベルトとワルシャフスキのふたりぶんで。なにしろ5万部の大部数だから、用紙不足が最大の難関。用紙確保のためデンマークから直接入手を工作しているところです。海外販売はまだだけど、そのうちに実現させますよ。」

ユダヤ人問題?

新宿に向かう車中、ワルシャワ大学日本語学科の女子学生だったマリラが両親とイスラエルへ移住を迫られたとき、駅に送りに行ったのはわれわれ3人だけだったと話すと、ゲーベルトの顔がほころんだ。「そのマリラなら知っている。近所に住む幼馴染みだったから。亡命させられる人たちには、駅には送りにいかれないからと、まえもって断ったものです。このあいだイスラエルに行つたとき、日にちが短くて一家を尋ね当たらなかつた。マリラはカナダにいるはずだ。」

75年に東京に留学していたマリラとわが家で再会できた日、「あの悲しい日に、日本人だけが送りにきてくれたのが嬉しくて……」と彼女は泣いた。ゲーベルトは黙つてうなずいていた。

ゲーベルト氏は前夜、カントルの芝居を観にバルコ劇場に出かけ、観劇後は招待者の坂本義和教授(明治学院大学)夫婦らに和風料理をごちそうになったと話した。クリコット2の女優さんが、これまた幼馴染みで、ぜひその人の舞台をみたかったという。

4月1日の千秋楽の夜、劇場のロビーのささや

かなお別れパーティーに加わった。その女優というのは『2度と戻らない』で悲しげな歌をうたうすこし太った掃除のおばさん役のウツィーナ・ルイバさんとわかった。ポーランド語のはかイタリア語、英語、フランス語となんでもこなす彼女はカントルの片腕といった存在らしい。「ほんとにちいさいころからよく知ってる同士よ」と言う本人もユダヤ人であることを隠そうとしなかった。

ゲーベルト氏の質問を思い出す。「京都に4日いるあいだ、いちにちポーランド研究者たちとあったが、そのうちのふたりがふたりとも『マゾヴィエツキはユダヤ人だ』と真顔で言い張る。あれはどういう心理なんですかね?」

「日本人は周囲にユダヤ人がいない。そのためかもしれませんね」と答えたが、この質問に明確に答えられる人がいるだろうか。

(注) ポーランドにおける少数民族別の人口はウクライナ人20万、白ロシア人18万、チェコスロヴァキア人3万、ユダヤ人1万5,000、リトアニア人7,500、ドイツ人2,500(89年9月17日、キシチヤク内相発表)の数字が公式では最新のもの。ただしシロンスク(シレジア)のドイツ人についてこれをはるかに上回る数が、その後伝えられているなど、疑う根拠はあるようだ。



新しい体制と「連帯」の任務

インタビュー：ヴワディスワフ・フラシニュク

Interview with Władyśław Frasyniuk, by Anna Bikont
Gazeta International, No.7, April 12, 1990

【ガゼータ・インターナショナル編集部注】来る4月19日から1981年以来9年ぶりに「連帯」の全国大会が開催される。以下はこの大会で「連帯」最高指導者の1人に選ばれるであろう下シロンスクの指導者、ヴワディスワフ・フラシニュクとのインタビューである。ワレサ委員長が大統領になるために再選を断念することになれば、フラシニュクが「連帯」委員長に選出される可能性もある。聞き手はアンナ・ビコント。【訳：水谷 駿】

——4月に「連帯」指導者の選挙がある。あなたも委員長候補の1人か。

ワレサは辞任の意向だ。だがそれが大会の前になるか後になるかはわからない。辞めるとしても彼はタダでは辞めない。おそらく後任はグダンスクから来るだろう。

——何年も前からワレサは「疲れた、辞める」と言っていた。人の反応を知ろうとしてだろうが。

ポーランドは今年中にも新しい指導者を戴くだろう。新しい大統領の名は、やはり、レフ・ワレサだ。

労働組合は有能な活動家が世に出世するごく自然な出発点だ。1組合員から始めて、他の社会的、政治的な高い地位に昇ってゆく。マゾヴィエツキ首相があなたに閣僚ポストを提供したというのは本当の話か。

事実だ。だが、1度にあまり多くの異動はよくないと考えて受けなかった。組合が弱くなる。

——つまり、自分が望んだからではなく、義務感から組合に残った？

適材適所が求められる時代だ。私は性格からして大臣の椅子よりも活動家の方が向いている。

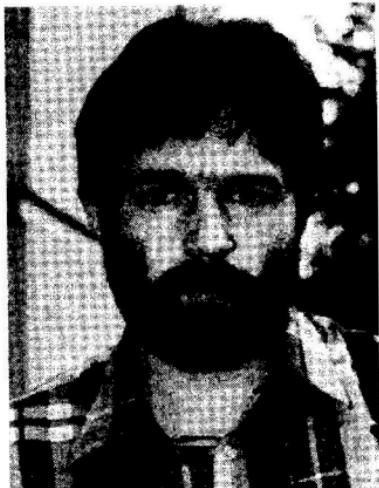
——戒厳令中、あなたが指導した下シロンスクの「連帯」は全国で最も行動的大きな成果をあげ、

組合員数も最大だった。

少し前、アンジェイ・ドラヴィチ〔ラジオ・テレビ委員会議長〕がヴロツワフに来た時、あまり分析されていないある問題を話しあった。たしかにわれわれ反対派は勝利したが、社会の中では何かがうまくいっていない、この大事な地方が田舎の小さな町と変わらない状態にゆっくり変化はじめている、と。ドラヴィチによれば、それはヴロツワフだけの問題ではなく、グダンスクもボズナンも、さらにワルシャワでさえそうだという。実際、ポーランドのすべてが同じような地域的偏狭主義にとらわれているのだ。

——あなたはヴロツワフで、「連帯」の指導者であるだけでなく、新聞も地方政府も動かしていると言われている。

私の町では何かがおかしくなっている。多少とも重要な政治権力は唯一、「連帯」地方執行委員会に集中している。この状態は早急に変化しなければならない。下シロンスク「連帯」市民委員会からは多くの援助を受けている。彼らは今、地方選挙を闘い、若くて行動力のある人々が参加している。少し前、「連帯」組合員の有能な経営者を県知事に送り込んだばかりだ。わが町や産業の行方に関心のある人々はこの知事の周りに結集してほしいと思う。惰性との闘いには自分が住む地域に対する誇りが不可欠だ。それを復活させなければならない。



ヴワディスワフ・フラシニュク

ヴワディスワフ・フラシニュク

Władysław Frasyniuk

1954年生まれ。ヴロツワフ市交通局のバス運転手だった1980年8月、バス営業所ストライキの組織者の1人となる。1981年2月、下シロンスク地方「連帶」の指導者に。1981年12月13日の戒厳令布告の日、鉄道労働者がくれた制服に身を包んで、会議のため滞在していたグダンスクからヴロツワフに戻るのに成功。ここで、警察機動隊に包囲された工場に堀を乗り越えて潜伏し、抗議ストライキを組織する。以後地下活動に従事するが、1982年に逮捕される。1984年に1度釈放されるが、またすぐ捕まり、今度は4年半の刑に。1986年秋に釈放。1989年には歴史的な円卓会議に「連帶」代表の1人として参加。

——「連帶」は弱体で、市民委員会とは協力といいうよりも競合関係にある。

この7年間、われわれは労働組合ではないといって非難されてきた。現在、友人や同僚たちが同じ批判を繰り返す。労働組合の任務と無関係の事柄は、政党や委員会や協会に移すべきだというのだ。こうした考えに私はずっと反対だったし、今後も反対してゆく。われわれの成功の最大の原因はこうした異なった任務のすべてを結合できることにある。「連帶」は、時には労働組合の側面が強く、時には社会運動の側面が強かった。形はさまざまあれ、つねに労働者の必要と利益に従って動いてきたのだ。いつも自己の利益に導かれる古典的な労働組合に変わるべきだというのか？ これは抗議行動に立てと要求するに等しい。「連帶」市民委員会の役割は今後確実に増大してゆく。だが地方選挙後、彼らは次に何をなすべきかの問題に直面するだろう。

——市民委員会のメンバーの多くは地方政府に参加することになる。

たぶんそうなるだろう。活動家の多数がやはり地方政府に参加するために、組合はさらに弱体化

しよう。だが、組合は存在を続けて、今後の数年間、最大の政治勢力として機能しなければならない。さまざまなイデオロギー的傾向を代表する人々を結集しなければならない。「連帶」が市民委員会に対して何をえらぶか、何をなしうるかを議論する場合、この困難な状況の下で市民委員会が「連帶」をいかに援助できかの問題が忘れてはならないと思う。政治の変化は「連帶」の偉大な成功であるが、その変化の代償として「連帶」が破産しようとしているのだ。

——財政的に、それとも政治的に？

組織としての「連帶」が、知識人たちが「連帶」から離れつつあることを憂慮している。これは、「連帶」が古いシステムを解体するための道具にすぎないと考えられていたためだと思う。この道具がすり減ってしまった今、新しい道具を見つければならない、と。

——「連帶」はいかにあるべきかという問題が明確でないことからさまざまな誤解や争いが生じていることも確かだ。

この問題をめぐる議論は今もあいまいなま

だ。「連帯」の弱点について語る場合、われわれは、とりわけいま現在「連帯」が何であるのかを忘れてしまうことが多い。組合が、社会的利益の代表者として、部分的には雇用者となっているという今の困難な状況をだ。国有企業の再編成に取り組み、抗議行動を鎮静化しなければならないのだ。今日の組合の基本的な任務は、労働者の防衛を可能とし、効果的とするような新しい労働組合法の制定を求めて闘うことである。労働組合は労働者自主管理評議会に似た権限を持つべきだと思う。

——企業経営をコントロールするために？ だがそうなれば、「連帯」と労働者評議会の間に眞の対立関係が生じよう。

1980年の要求を実行に移すチャンスがいま初めて与えられているのだ。つまり企業の経営に参加し、自らを職場と一体化させることである。「連帯」は社会主義経済の建て直しに参加している。この困難なプロセスの中で、企業に対しても影響力を行使しなければならない。しかも、民営化が実施され、企業が株式会社化されても、その株主が政府だけだとすれば、自主管理評議会の役割は決定的なものとなる。

——経済的ストライキ闘争を指導する自分を想像できるか。

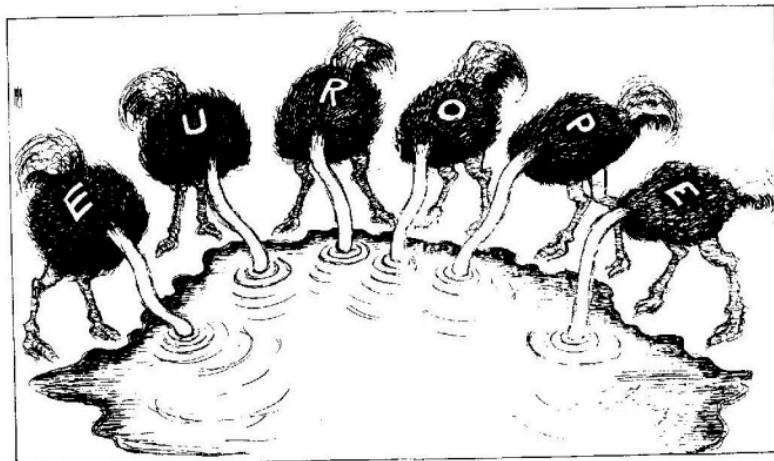
想像できないね。労働者の不満に直面することになるが、他に道はないということを説明しなければならない。企業は利益をあげねばならず、市場の存在が必要だ、と。その場合にのみ、貨上げも期待できるのだ、と。それは、12月13日（戒厳令布告）後よりも勇気のある仕事だ。

——政治的ストライキの指導者としての自分は？

想像できる。組合は組合員たちが生活する場の諸問題を効果的に解決しなければならない。市の行政やマスメディア利用、地方新聞、独占、ニセ会社（ノメンクラトゥラが設立した）などの問題だ。組合は効果的な対策を要求する権利を持っている。最後の手段としてストライキがある。

——新しい組合指導部は、最大限でも100万人の組合員によって選ばれるにすぎない（組合員数は200万以上だが、組合費を払っているのはその半分にすぎず、彼らにだけ投票権がある）。このことが「連帯」にとって持つ意味は？

大会が組合員の士気を高め、新しいメンバーを獲得できるだけの明確なプログラムを打ち出せる



ことを期待している。再合法化以降、「連帯」は組合員の動員に成功していない。かつていつしょに働いていた人々が戻って来ることを期待している。労働組合とは何なのか、それは労働者にどのような機会を与えるのかを、はっきりと口に出して人々に語りかけなければならない。こんなことは誰でも知っていると考えるとすれば、それは大きな間違いだ。

——「連帯」は、近く解体が予想される大企業において最も強力である。

これまで自らの利益だけで動いてきた各産業別組織が現在は企業の改革に取り組んでいる。彼らは、労働者が職を失わず、しかも企業が利益をあげられるようになるよう、巨大企業を分割する方法を探し求めている。「連帯」の活動家は経済学の用語で考えるようになった。

——世界の労働組合の大勢がそうであるように、地域的構造よりも産業部門別構造の方が優勢になってゆくと考えるか。

そうはならないだろう。地域的構造が効果的であることは証明ずみであり、社会的利益を守るうえで大きな成果を上げてきた。経済の再建には数年を要するだろう。このような時期に、より効果的で適切なのは地域的構造である。

——1988年のストライキの過程で、われわれが待ち望んでいた若くて有能な指導者は生まれなかつた。若い人に忠告したいことは?

こう訴えたいと思う——専門家としてあれ、企業経営者としてあれ、組合活動家としてあれ、実績を築くことが今ほど容易な時代はない。今の若い人たちが挑戦しようとしないことが私は理解できない。

リトアニアの自由はロシアの自由 アダム・ミフニク

Freedom for Lithuania means freedom for Russia, by Adam Michnik
Gazeta International, No.7, April 12, 1990

リトアニアからもモスクワからも良い知らせが待たれる。だが、軍が建物を占拠した、モスクワの最後通告が来た、緊張が高まっている、等々のニュースばかりだ。

ゴルバチョフが直面する情勢の構造とソ連の権力システムの複雑さは十分に理解できる。権力機関内部の新スターリン主義者と改革派の争いも知っている。だからこそわれわれは、民主的ペレストロイカに何度も支持を表明したのだ。モスクワの政治指導部の政策にわれわれは絶対に無関心でいることはできない。

リトアニアは独立国家の回復を求めている。指導部の戦術に誤りはないか、ある種の考えは過激ではないか、その実現を急ぎすぎていないか、これには議論の余地はある。

しかし、眞実はこうだ。リトアニア民族には自由を求める権利があり、ロシア国家はこれを

抑圧することによってロシア人の自由をも抑圧しているのだ。他民族を抑圧する民族に自由はない。これは普遍の真理である。

リトアニア議会は独立宣言の撤回を求められている。何という最後通告だ。相手を本人も望まない状況に追い込んではならない。ランズベルギスの立場に置かれれば、自由で独立した国に生きたいとする白国民の願いをゴルバチョフも否定できないだろう。そんなことは誰にも期待すべきではない。

今ならまだ何でも可能である。対話と合意は手の届くところにある。東側でも良識と民主主義が勝利することを信じよう。暴力によるリトアニア人の自由の抑圧は、ロシアとヨーロッパの民主主義を後退させる。

ポーランド国家も、このような不吉な事態の回避に全力をあげて努めるべきである。

ポーランド日誌

1990年2月22日～3月14日

2月22日 ポズナンでポーランド＝西ドイツ・フォーラムが開幕。ワイゼッカーウ西独大統領「相互通商を尊重し、国境は分割線よりも架け橋に」とメッセージ。ゲレメク「連帯」国会議員団長は、ドイツ統一支持を表明。●世界銀行との間に融資協定調印。今後17年にわたり、工業製品輸出のため2億6,000万ドル、農業開発のため1億ドルのローンが決まる。●『ガゼータ・ヴィポルチャ』紙、「連帯」大会が4月19日から5～7日間、グダンスクのオリヴィア・ホールで開催が決まると伝える。

2月23日 シェワルナゼ、ソ連外相、ドイツ統一問題に關し、ポーランドの「2+4」会議参加に支持を表明。●下院、ミルクや石炭その他消費財に対する補助金半減などを盛り込んだ予算案を激論のすえ採択。●『ガゼータ・ヴィポルチャ』紙によれば、国会調査の結果、全国に数千ある旧統一労働者党の建物のうち、党が独自財源で建てたのは13棟にすぎないという。●ワレサ委員長、地方議会選挙への取組みの強化のため元自由ヨーロッパ放送ポーランド局長のズジスワフ・ナイデルを「連帯」市民委員会議長に任命。

2月24日 ヴロツワフで南アのネルソン・マンデラ釈放を祝う200～300名のアフリカ人学生のデモを一団の「スキンヘッド」集団が襲撃。警察の到着まで彼らを

防衛した「連帯」は、事件を非難するとともに最近の非寛容の空気の拡大を警告する。

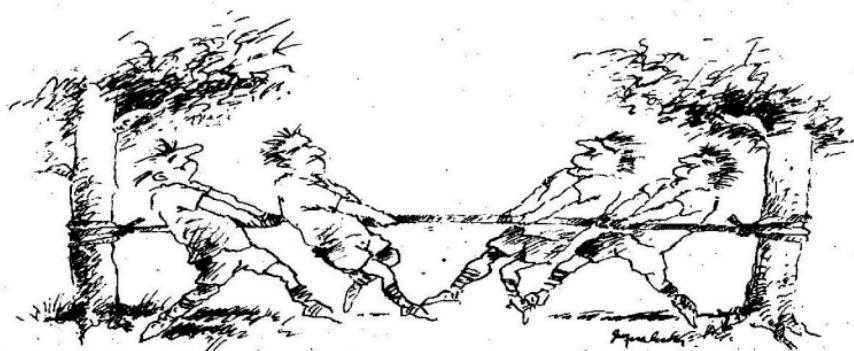
2月25日 ポーランド議会市民クラブ〔「連帯」系国会議員集団〕とソ連人民代表大会議員グループがポーランド・ソ連議員クラブを設立。

2月27日 サッチャー英首相、ドイツ国境問題をめぐるポーランドの立場に支持を表明。●ポーランド訪問中のアレンス・イスラエル外相との間で両国の国交回復（1967年に断絶された）が合意される。

2月28日 議会市民クラブ（OKP）が非公開会議で組織再編成の是非を検討。分裂の可能性も伝えられる。●「農民連帯」全国評議会、2日間の会議を経て、現政府の農業政策の変更を求める決議を発表。●コール西独首相、ドイツ国境問題をめぐるポーランドの要求に「理解」を示したと伝えられる。

3月1日 ワレサ委員長、記者会見。ソ連のゴルバチョフ議長は現在のソ連邦を解体して、民主主義的基礎に立った新しい連邦を作るべきだ、と語る。●『ガゼータ・ヴィポルチャ』によれば、1989年下半期の工業労働者の月平均賃金は約32万ズウォティだった。

3月2日 西ドイツのコール首相、国境問題をポーランドの戦時賠償請求権放棄と結びつける発言。ポーランド側はこれに猛反発。●ニエザビトフスカ政府スポーツバースン、チェコスロvakiaやハンガリーとは事情が違って、今すぐポーランドからソ連軍の撤退を要求するのは非現実的だと語る。●ワルシャワのソ連大使館前で「カティンの森」犠牲者遺族40数名が真相究明の促進を求めるデモ。●日本のダイハツ工業、



rys. MACIEJ UFNALEWSKI

ポーランド進出計画断念の可能性を示唆。

3月4日 西ドイツのゲンシャー外相、国境問題を戦時賠償問題とからめるコール首相の発言を批判。●ワルシャワラジオによれば、南東部ヤスコヴィツェで推計200~1,000人の「1944年のスターリンの犯罪の犠牲者」の墓地が発見されたという。

3月5日 コール西独首相、国境線承認の条件としてポーランド戦時賠償請求権の放棄を重ねて要求●ミッテラン大統領、訪仏中のドブチェック・チェコ国会議長に現ドイツ国境の国際的確認を提唱。●日本、ポーランド向け輸出保険を再開。

3月6日 西独政府、国境問題に戦時賠償請求権をからめるコール首相の要求を取り下げる。ニエザビトフスキ・スポーツカースバーン、この決定を一応歓迎。

3月7日 中央統計局の発表によれば、2月の工業生産は対前年同月比23%減に。インフレ率は1月の78%に対し2月は7%に低下。失業者は12月の1万人が2月には15万2,000人に急増。●首都を中央直轄に置く地方自治法改正案に反対して「連帯」市民委員会支持者数百が国会議事堂にデモ。

3月8日 西ドイツ議会、現在のポーランド、ドイツ国境を承認する決議を採択。●ワレサ委員長、大統領選出馬の意図は否定しつつも、「自分が大統領になつてやりたいことがいくつかある、たとえばソ連軍の撤退問題がそうだ」と語る。●1968年3月事件記念日。ワルシャワ大学構内の記念碑にサムソノヴィチ教育相、ボニ「連帯」マゾフシェ地方議長らが献花。独立学生連盟の学生約200名も集会。●閣議、企業私有化法

案を採択、企業従業員に株式購入の優先権を。

3月9日 ワレサ委員長の現行路線を拒否し、1980年8月の理想に戻ることを主張する新労組「連帯80」がワルシャワ地裁に登録申請。申請者の中には、M・ユルチク、S・ヤヴォルスキらの名が。●『ガゼータ・ヴィポルチャ』が軍改革の遅れに対し将校の間で不満が高まっていると伝える。●ヤルゼルスキ大統領、マゾヴィエツキ首相訪仏。仏側のミッテラン大統領、ロカル首相らと会談へ。

3月10日 訪仏から戻ったマゾヴィエツキ首相、ドイツ統一問題について「ポーランドはフランスの支持をあてにできる」と語る。

3月12日 ニエザビトフスキ政府スポーツバーン、リトニアとソ連が問題を平和的に解決することを期待すると語る。ワレサ委員長はリトニア指導部に電報を送り、独立に向けた諸措置を歓迎し、事態の平和的進行を望むと伝える。●グダンスクで「連帯」全国委員会が会合、組織の今後のあり方について検討。

3月13日 仏、西独両外相、「2+4」会議でのドイツ国境問題の討議にポーランドの参加を認めることに。

3月14日 政府スポーツバーン、ドイツ国境問題をめぐる「2+4」会議へのポーランドの参加が確実になったと述べる。●ポーランド駐留ソ連軍の段階的撤退と駐留条件の変更に関する交渉が近く始まると発表。●『ガゼータ・ヴィポルチャ』紙によれば、国会の内務省活動調査特別委員会は、1980年から1989年までに発生した警察の関与が疑われる93件の死亡事故について近く調査が始まるという。〔編訳：水谷 駿〕

編集後記

☆コンスタンティ・ゲーベルト氏を囲んでの研究集会では多くの方々のお世話になりました。機会を作つて下さった坂本義和明治学院大学教授、通訳をお願いしたレナータ・ソヴィンスカさん、そして研究集会参加者の方々にお礼申し上げます。

☆研究集会でのゲーベルト氏の報告、そして新聞等の報道によれば、ポーランドではインフレが収束し、通貨の交換レートも安定しつつあるとのこと。経済再建が軌道に乗ることを期待してやみません。

☆「連帯」内部では、新しい情勢に対応して新しい動きがいろいろあるようです。新聞でも伝えられた「ワレサ委員長、大統領選出馬へ」というのもその

ひとつでしょう。4月19日から開催される「連帯」大会でどのような議論が展開されるか、注目されます。

☆この「連帯」大会に向けて資料センターから代表団を組織したかったのですが、準備期間の不足などのため、結局実現しませんでした。この過程で何名かの方方にご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。

☆あらためて夏にポーランド訪問団を組織したいと考えています。8月31日のグダンスク協定10周年記念日をはさんで、激動の東欧諸国のことひとつ、ふたつをまわりたい、そんなイメージです。関心のある方、提案、意見などを寄せ下さい。早急に具体的な計画を立てるつもりです。 90.4.20 (み)

☆☆ ポーランド月報既刊号目次 ☆☆

1989年7月号(通巻88号) 24頁 400円

「連帯」の圧勝——示された民意.....	3
「連帯」在外調整委員会のコメント	
「連帯」市民委員会選挙綱領.....	4
選挙闘争を担うのは誰か.....	10
「連帯」市民委員会での論争	
ヨーロッパに妖怪が徘徊している.....	14

アダム・ミフニク

革命に代えて——円卓会議合意がもたらしたもの.....	16
ヤツェク・クーロン	
ポーランドにおける妊娠中絶と離婚の現状.....	21
ポーランド日誌 1989年4月26日～5月27日.....	21

1989年8／9月号(通巻89／90号) 36頁 500円

要求志向か改革志向か.....	3
「連帯」とは何か、いかにあるべきか：「連帯」活動家座談会	
民主主義への第一歩.....	14
インタビュー：アダム・ミフニク	

経済改革の展望——われわれはこう考える.....	24
政府と「連帯」の見解	
ポーランド日誌 1989年5月28日～6月23日 2/34-35	

1989年10月号(通巻91号) 24頁 400円

君たちの大統領、われわれの首相——「連帯」政権をめぐって	
君たちの大統領、われわれの首相.....	3
アダム・ミフニク	
あまりにも危険な「大連立」.....	4
カロル・モゼレフスキ	
われわれはこう考える：議員アンケート.....	6
マゾヴィエツキ内閣の誕生.....	8
「連帯」在外調整局のコメント	
国民全員の一一致した努力を.....	9
マゾヴィエツキ首相の就任演説(要旨)	
経済再建には西側資本が必要.....	10

ズビグニエフ・ブヤク氏に聞く

歴史の曲り角で.....	12
--------------	----

フルシャワ報告：上藤幸雄

僕が見た「連帯」.....	16
---------------	----

ポーランド・スタディツァ：木村元彦

ポーランド日誌 1989年6月24日～8月24日.....	20
-------------------------------	----

1989年11月号(通巻92号) 20頁 400円

新しいポーランドの登場 レフ・ワレサ.....	3
国家の政治的再建と経済危機の克服.....	4
マゾヴィエツキ首相就任演説 1989.9.12	
ともにポーランドを変えてゆこう.....	10
タデウシュ・マゾヴィエツキとのインタビュー	
「連帯」主導政権の労働組合政策は？.....	14
ヤツェク・クーロン労働・社会政策相に聞く	
地方自治の復権.....	16
上院地方自治委員長イエジ・レグルスキ教授に聞く	
ポーランド日誌 1989年9月11日～23日.....	2/19

1989年12月号(通巻93号) 20頁 400円

「連帯」の理念と『週刊連帯』編集長の更迭	
——ワレサ委員長の決定をめぐって	
問われるべきは何に対する忠誠か.....	3
『週刊連帯』の56号 ヤン・ドヴォラク	
承服できない編集幹部の更迭 『週刊連帯』編集部の「連帯」全国執行委員会あて通告.....	6
『週刊連帯』編集部を支持する 下シロンスク....	7
ワレサ委員長の見解	7
経済改革はどう進めるか 「連帯」専門家に聞く....	8
J・ディエトル／C・ユゼフィアク／W・チ	
ェチャコフスキ	
諸君の首相、われらの役人.....	12
ノメンクラトゥラの現状 マレク・ヘンツレル	
ポーランド日誌.....	17
1989年8月25日～9月10日／9月24日～10月12日	

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F

電話 03-261-2585

郵便振替 東京 2-81069

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)